COMMUNI STATION
あなたと国際交流協会をリンクする会報紙
［コミュニステーション］
2010 Oct.
VOL.85

Essay。エッセイ

創立20周年の歩み

豊橋日独協会
副会長　竹内文子

豊橋日独協会は、本年創立20周年を迎えます。奇しくも来年は日独修好150周年とのことで、一層感慨深いものがあります。国内外の多様化、複雑化で時の流れの速さをことさらに思うのは、単に高齢といういたし方ない問題はあるにせよ、私のみではないことと思います。創立当初の記憶を手繰り寄せてみますと、やたらチャレンジ精神は旺盛であったようです。

数えきれぬほどの失敗と反省、ささやかな成功の喜びを糧として、今日の進化した豊橋日独協会が存在すると確信しています。月並みな表現ですが、「長いようで短い」この20年というのが、正直な心境です。

当協会の会員は全員、青少年交流、会員交流、産業交流、文化交流、スタディ、広報の6つの委員会に所属していて、それぞれ活動をしています。また、月に1回“シュタムティッシュ”という、気楽に集まり自由におしゃべりをする会があり、時には面白いアイディアや企画が生まれることもあります。毎回ドイツからの留学生を招待しますが、今では彼らの友達、その友達という具合に輪が広がり、国際色豊かな会となりました。国際交流とはこんなところから芽生えることを実感できる、またとない機会だと思います。

創立当初から行っているドイツと豊橋の若者達の交流を目的とした「音のかけ橋コンサート」は10回を重ね終了しましが、新たに今年「豊橋青少年オーケストラキャンプ」という形で始まりつつあります。「音のかけ橋」では、ドイツの若者達は全員当会員宅にホームステイをし、日本の家庭の味を経験しました。慣れない文化や習慣に戸惑いながらも懸命に交流し、時にはホームシックで夜中に泣きだす少年を慰めるため、夜の街へ車を走らせたり、階段を踏み外して転倒、捻挫をした女子生徒を整形外科に連れて行ったりなど、数々の思い出が走馬灯のように過ぎていきます。国際交流は“キャッチボール”と常々考える私は、なんとか日本の若者がドイツへ訪問出来ることを願っていましたが、教育システムの違いからか実現は容易ではありませんでした。

ようやく愛知県立豊丘高等学校の和太鼓部一行が、夢をかなえてくれました。彼らにとってもかけがえのない経験になったことと思います。

他にもクラシック音楽の本場とも言えるドイツから何人もの音楽家を招聘、ユニークなリサイタルを開催し、市民の方々に喜んでいただいております。

この度、神野信郎会長には他分野においても多くのかけ橋として尽力なさった功績が認められ、ドイツ連邦大統領より『連邦功労勲章功労十字小綬章』が贈られました。

フォルクスブルク市 シュネレッケ市長とともに

9月18日から26日までの日程で、創立20周年を記念して第7回ドイツ視察旅行に出かけてまいりました。「明るく楽しく元気よく」の旗印を掲げ、神野会長のもとヴォルフスブルクをはじめ、ベルリン、ウルムなどドイツ各地の独日協会会員並びに関係者との交流を重ね、参加者全員が多くの交流成果を土産に、無事帰国することができましたことを大変嬉しく思っております。

創立よりこのかた多くのご支援を賜りました豊橋市、財団法人豊橋市国際交流協会の皆さま、会員の方々に心より厚く御礼申し上げます。